The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Characteristics of interaction between caregivers and children with chronic diseases in oral medication-taking situations: A validation study of the Interaction Rating Scale
Author(s)	安本, 卓也
Citation	大阪大学, 2025, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/103153
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　安本　卓也　）	
論文題名	Characteristics of interaction between caregivers and children with chronic diseases in oral medication-taking situations: A validation study of the Interaction Rating Scale （かかわり指標（IRS）による慢性疾患をもつ子どもと養育者の経口服薬時における相互作用の特性）

論文内容の要旨

【目的】
子どもの適応的な服薬行動を維持するうえで、養育者と子どもの相互作用は重要である。本研究では、養育者―子ども間の相互作用の質を観察によって評価する尺度であるかかわり指標（Interaction Rating Scale: IRS）の服薬場面における適用可能性を検討した。

【方法】
66組の養育者―子どもペアを対象に、服薬場面における相互作用についてIRSを用いて観察・評価した。尺度の信頼性は、内部一貫性（Cronbach's α）、評定者間信頼性および再テスト信頼性（ICC）により検討した。妥当性は、Positive and Negative Parenting Scale (PNPS)およびSocial Skills Scale for Preschool Children (SSS)との関連から検証した。

【結果】
IRSの総得点、養育者得点、子ども得点はいずれも高い内部一貫性（α＝0.86～0.92）を示し、再テスト信頼性（ICC＝0.76～0.80）および評定者間信頼性（ICC＝0.86～0.91）も良好であった。また、IRSの指標は、予測された方向でPNPSおよびSSSとの間に一部有意な関連を示した。

【考察】
本研究の結果は、IRSが服薬場面における養育者―子ども間の相互作用の特性を信頼性・妥当性をもって評価可能な尺度であることを示唆している。今後は、より多様な患者群における尺度の妥当性の検証や、子どもの服薬行動との関連の検討が望まれる。

様式７

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　安本　卓也　）			
論文審査担当者		（職）	氏　名
	主 査	教授	毛利　育子
	副 査	教授	吉村　優子
	副 査	講師	浦尾　悠子

論文審査の結果の要旨

子どもの適応的な服薬行動を維持するうえで、養育者と子どもの相互作用は重要である。本研究では、養育者―子ども間の相互作用の質を観察によって評価する尺度であるかかわり指標（Interaction Rating Scale: IRS）の服薬場面における適用可能性を検討したものである。66 組の養育者-子どもペアを対象に、服薬場面に特化した IRS 指標を作成し、服薬場面をビデオ撮影したものを２名で評価観察・評価し、内部一貫性（Cronbach's α）、評定者間信頼性および再テスト信頼性（ICC），Positive and Negative Parenting Scale (PNPS)および Social Skills Scale for Preschool Children (SSS)との関連から妥当性の検証が行われた。結果,IRS の総得点、養育者得点、子ども得点はいずれも高い内部一貫性（α＝0.86～0.92）を示し、再テスト信頼性（ICC＝0.76～0.80）および評定者間信頼性（ICC＝0.86～0.91）も良好であった。また、IRS の指標は、予測された方向で PNPS および SSS との間に一部有意な関連が示された。
本研究の結果は、IRS が服薬場面における養育者―子ども間の相互作用の特性を信頼性・妥当性をもって評価可能な尺度であることを示しており、治療において非常に重要である服薬に関し、より確実に子どもが服薬できるにはどのような介入がありうるか、を検討できるツールとなりうるものである。今まで、適切な指標がなかった分野において、利用可能な尺度が開発されたことは、新規性・独創性を備えたもので非常に有用であり、学位取得に値すると考える。